

[UUN:\*]UUN 11(1) 2006.11.06 分子研研究会「真空紫外域発光の探索」のお知らせ

[UUN:\*]UUN 11(2) 2006.11.16 UVSOR 利用者懇談会からのお知らせ（添付ファイル）

\*\*\*\*\*  
\*  
\* UVSOR USERS NEWS (UUN) Vol.11 No.1 (2006. 11. 06) \*  
\*  
\*\*\*\*\*

UVSOR 利用者懇談会会員各位

複数のメールリストを用いてアナウンスをさせていただきますので、重複して受け取られる方も多数おられると思いますが、ご容赦ください。

真空紫外域発光に関する分子研研究会を企画しております。締切が迫っておりますが、ふるってご参加をお願い致します(ご希望に副えないかもしれませんが参加者に旅費のサポートが可能です)。日時・プログラム・申し込み方法の詳細は以下の URL をご覧下さい。

<http://www.uvsor.ims.ac.jp/event/20061117itoken.html>

代表 信州大学工学部 伊藤 稔

-----  
分子研研究会「真空紫外域発光の探索」

会期 2006 年 11 月 17 日(金) 13:30 - 18 日(土) 15:10

場所 自然科学研究機構 岡崎コンファレンスセンター 小会議室

プログラム・申し込み

<http://www.uvsor.ims.ac.jp/event/20061117itoken.html>

問合せ先 e-mail アドレス

[vuv@fir.fukui-u.ac.jp](mailto:vuv@fir.fukui-u.ac.jp)

目的 シンクロトロン放射 (SR) 光という紫外から X 線領域の利便性の非常に良い光源が身近なものになって既に半世紀近くが経過しようとして

いる。この間、SRを光源として凝縮系の様々な発光現象が調べられ、電子励起状態の緩和過程について極めて重要な知見が数多く発見されている。ところが、これらの発光現象の測定には大きな「欠落点」が存在する。それは、せっかく凝縮系サンプルを紫外からX線領域の光で励起しても、発光そのものは可視域のものしか観測してこなかったという事実である。その理由は明白で、真空紫外域の発光を観測するには、発光観測系そのものを真空状態にする必要があるという実験上の制約のためである。この実験的困難を乗り越える努力をこの分野の研究者が怠ってきたといっても過言ではないであろう。勿論、そのような試みが全くなかった訳ではない。1970年に、PooleyとRuncimanは、X線と電子線を励起源にしてアルカリハライド結晶からの発光を真空紫外域で観測している。しかし、この方法では励起スペクトルを測定することが不可能であったため、後年オージェー・フリー発光として知られることになった重要な発見を取り逃がすという結果に終わっている。近年、新しいタイプの高速度シンチレータ材の開発の要求とあいまって、この「欠落」スペクトル領域の発光現象が注目を集めている。また真空紫外域の発光を観測するためのCCDカメラが最近では入手可能になっている。このような研究動向・実験技術革新の背景のもとで、本研究会をもつことは極めて時期に適ったものになると考える。

\*\*\*\*\*  
\*  
\* UVSOR USERS NEWS (UUN) Vol.11 No.2 (2006. 11. 16) \*  
\*  
\*\*\*\*\*

## UVSOR 利用者懇談会 会員の皆様

来る1月12日から14日まで、広島国際会議場で、第20回放射光学会が開催されます。例年、この機会に全国のUVSOR利用者が集まって話し合いを持ってきました。今回も1月13日の午前中に懇談会の会場を設ける事にいたしました。

懇談会には、UVSORの施設長の小杉先生はじめUVSORのスタッフの方もご参加いただける事になっています。また、小杉先生からはUVSORの現状や将来方針などについてのお話を伺えると思います。利用者の皆様には奮ってご参加いただけますようお願い申し上げます。

なお、懇談会において取り扱って欲しい議題や、UVSORに対する要望等がございましたら、会長宛ご連絡下さい。

UVSOR利用者懇談会会長

日 野 照 純

hino@eng.ehime-u.ac.jp